

卒業論文作成のための 手引き

【執筆編】レポート・論文を効率的に書くために知っておきたいこと

大仰なタイトルが冠してあるが、これを読めば卒論がA評価となるという訳では決していない。ここでは、「如何に効率的に論文を書くか」ということを、本学の図書館が所蔵している資料をヒントにまとめていこうというものである。

これから「論文の書き方」の**実際的な**方法論を述べるのだが、まずはやはり、理論を踏まえた上で理解してもらう必要がある。ここでは、まずは論文らしい論文を書くにあたって必要な理論的な基礎を学んでもらい、最終的に、オーソドックスな「論文の書き方」を提示していきたい。

- ※ あくまで「論文の書き方」であることに注意。自分が選択したテーマを「どう調理するか」ではなく、「どう盛り付けるか」ということ。テーマの調理方法は、指導教授との相談で。
- ※ ただし、調理に必要な「食材」がどこに行けば手に入るのか、即ち「先行研究の探し方」については、**大学図書館のレファレンス・サービス**でも相談を受付けている。

「何を明らかにするか」で7割完成

卒業論文は、学習の成果であるレポートと異なり「研究の成果」である。端的にいえば「新規性」が重要である。そのためには、過去の研究を時間が許す限り網羅的にレビューしなければならないし、着地点を何処に落としこむかを吟味する必要がある。換言すれば、「テーマを選んだ理由」と「何を明らかにしたいか」について（つまり、何故そのテーマ（仮説）を選び、それによって自分が何を明らかにしようとしているのかを）十分に考える必要がある、ということだ。

実は、これで論文のほぼ7割は完成と言っても過言ではない。図1でいう「研究の背景」、「研究の目的」、「研究の方法」、「本論の主張」などは、これをしっかり考えておくかどうかで書けるか書けないかが決まるからである。

さらに言うならば、ここを明確にしておかないことには、それに続く調査・実験や、結論を述べる段もまったく進まないのである。

論文は三部構成で書け

学術図書・専門図書と呼ばれるものや雑誌論文をばらばらと見てみよう。ほとんどの文章が、その構成を**序論・本論・結論**の三部構成にしているだろう。「研究の成果」、即ち「問い」に対する「答え」「考え」を読者に伝えるためには、基本的に三部構成が良いとされているからだ⁽⁹⁾⁽¹¹⁾。卒業論文もこれに倣い、三部構成にするべきだろう。

もちろん、漠然と三部構成と言ったところで、その「構成」を構成する要素が多々あることは言うまでもない。図1は、それらの主だったファクターをあげたものである。

論文	
序論	・研究背景 ・研究の目的 ・本論の構成
本論	・研究の方法 ・調査・実験の概要 ・調査実験の結果
結論	・仮説検証(考察・結論) ・本論の主張(仮説検証の結果)

図1 論文の構成

分野によって多少の差異はあるが、大まかにこれらを押さええていれば、少なくとも書き落としは無いと思われる。各要素の詳細は後述するので参照してほしい。

論文らしい文章を書け

そもそも論文とは何だろうか？このことについては、最後に紹介する論文等の書き方を示唆する図書に説明を譲り、ここでは割愛する。とくに、事例をあげながら「これが論文！（レポート）」と詳細な説明を付しているのが酒井聡樹著『これからレポート・卒論を書く若者のために』⁽⁹⁾である。

では、逆に論文ではないものとは何だろうか？学生がとくに陥りがちなのは、ア) 自分勝手に書き連ねる、イ) 読書感想文になる、ウ) 文献の要約になる、などである。前出の酒井によれば、「学術の対象となりえない題材を扱っている」、「調べたことを書いただけである」ものも多いようだ⁽⁹⁾。十分に気を付けて欲しい。

「論文らしい論文」を書くための注意事項は多くあるが、ここにすべて書き連ねる訳にはいかない。以下では、主に「書き方」に関する要点だけを幾つか列挙しておく。

① 一文は短く、かつ一文一意で

だらだらと一文が長いと、結局何を言いたいのかぼやけることが多い。だから、短く、かつ簡潔に、がベストなのである。長い文章を制御できるのはもっと書き慣れてからである。

② 段落を意識して、見た目にも読みやすく

①と似ているが、段落も長過ぎるのは良くない。形式段落をうまく活用して、意味段落を構築しよう。パソコンのワープロソフトで書く場合、A4の標準文字設定で5行、どれだけ多くとも8行以内に抑えると良い。

③ 難読漢字、詩的な表現などは使わない

“パソコンを使っているせいか、自分でも読めない漢字を使って”⁽¹⁰⁾いたり、覚えててよく分からないけど何となく「論文っぽい」言葉を使ってみたり、抽象的で自分しか分からないような文体で書いたりしてはいけない。他人に伝える、納得させるように理論を展開すると、案外文章はシンプルになる。

④ 余分なものは書かない⁽¹¹⁾

③と似ているが、思い付いたことを全て書いてしまうと論文にはならない。“「核」と「それを支えるもの」以外のものを書くと、文章の一貫性が損なわれる”のである。

また、「・・・だろうか」といった疑問形で終わらせたり、体言止めをしたりしてはいけない。必ず、文章は自信を持って断定して書く。

⑤ 結論が先、その後に理由⁽³⁾

「Aであり、Bであり、Cであるから、Dである」ではなく、「Dである。理由は、次の三点である。一点目はAである。そして、二点目はBで、さらに三点目としてCも挙げられる。」などとする。

⑥ 逆説の接続詞「しかし」「だが」に注意

「Eだが、Fだが、Gだが、Hである。しかし、Iである」と、逆説ばかりだと非常に分かりにくい⁽¹¹⁾。ただ、①や②を意識していると、自然と直ってくることはある。逆に、接続詞の少用（⇔多用）も、分かりにくい文章になってしまう。繰り返したが、**余分なことは書かない**、そして、書くべきことを落とさない。

⑦ 結論として「べき」論は述べない⁽¹⁾

具体的な案を示して、より specific（「漠然に」の反対の意味）にしていく。結論として「Jすべきだと思おう」（ex.「地球温暖化は、一人ひとりの心がけ次第で解決する。全世界の人間が、より地球温暖化に関心をもつべきだと思おう」）は×で、はじめの問いに答える形で結論付けるのである。この例なら、地球温暖化に関心を持たせるための具体策などを述べることになるだろう。⁽¹¹⁾

⑧ 肩の力抜いて

論文だからといって、背伸びして難しい言葉を使う必要はない（かと言って口語体ではダメ⁽⁹⁾）。論文の目的は、読者に考えを「伝える」こと。

三部構成内構成要素

構成要素それぞれについて、もう少し具体的に見ていこう。それぞれのファクターがどういうものを簡単に説明をし、その「書き方」にも言及する。

序論

研究背景／研究動機

【説明】 自分の研究対象にはこれまでどんな研究があつて、どんな結果となっているかレビューをする部分。研究が進むとどんどん文献が付け足されていくことになるので、うまく整理をしよう。「研究背景」を書く前に、どうしてこの研究テーマを対象としたか（「研究動機」）を書く場合もあるが、感想文風になりがちなので、あまりオススメしない。

【書き方】 順番としては、**本論・結論を書き終えてから書き始める**ところである。研究分野やスタイルにも依るが、ア) 比較的長い期間支持された理論、イ) それを強固な根拠で支持した理論、ウ) それらに対する反証、エ) 最近の動向か、大きな転換／転機などをあげると良い。逆に、これらは押さえるべき文献だといえよう。

研究の目的

【書き方】 「研究背景」を受けて、背景との関連や、その中でどの位置づけを意識しながら、研究対象について自分はどのような研究を行っていくのか述べる部分。

【書き方】 背景であげた引用・参考文献の、ア) 何をしようとしたか、イ) どのようなプロセスをとったか、ウ) 結果どうなったか、エ) 著者の主張は何か、を押さえながら、自分はそれとは異なり（あるいは同様に）こういうことをする、と書く。基本的に、最後は「**A**を明らかにする」として締めくくることが鉄則。

本論の構成

【説明】 書いた論文がどのような章立てになっているか、序論で述べておくと親切。

【書き方】 第一章では、……。第二章では、……。を述べ、それを受けて、第三章では……。最後に第四章で、……。」など。

ここまでが序論である。繰り返しになるが、**序論は最後に書くこと**。また、序論はあくまで序論であるから、あまり長くし過ぎないこと。A4で2～5ページもあれば十分だろう。バランスとしては、序論:本論:結論=2:7:1 or 1:8:1程度である。⁽⁴⁾⁽⁸⁾

本論

用語・概念の整理

【説明】 特殊な用語や概念、新しい言葉などについては、概念の整理や用語の（本論での）意味を定義しておくとても非常に親切である。

【書き方】 「**B**氏が述べているように、**C**とは、**D**のことであり、ここでは**B**氏にしたいが、次のように定義した」あるいは、「**E**氏は、**C**について**D**と述べているが、本論では、これを次のように定義し直して用いた」など。

研究の方法

【説明】 論文を書く前までの段階で、どんなことをしてきたかを書く部分。「文献レビュー」なのか、「社会調査（いわゆるアンケート）」なのか、「実験」なのか。もちろん、「**研究目的**」を達成するために**最適と思われる方法を挙げる**。逆に言えば、目的が決まると研究方法も自ずと決まるのである。

【書き方】 「**A**を明らかにするために、本研究では、来館者に対する質問紙調査によって、利用者の意識を把握する。さらに、調査結果の分析を元に**A**について考察を加えるものとする。」など。

調査・実験の概要

【説明】 レビューならどんな資料を何本読んだか、社会調査なら対象者や期間、実験ならどんな機器・設備で何人サンプリングしたか、などを書く部分。

【書き方】 「〇月×日～〇月△日の間に、質問紙を郵送して、・・・」「Fという文献から、Gの箇所を抜き出し、・・・」「Hというコンピュータ上の刺激に対して、どのように反応するか・・・」など。

調査・実験の結果

【説明】 行った調査・実験の結果を記述する。後の考察で使用する部分については漏れないように。逆に、目的に関連しない結果は不要。

【書き方】 この段では、主として「結果」に着眼して書く。考察等は後からするので書かない。一言で説明するのは難しいので、別紙文献リスト(9)のp.92～を参照。

ここまでで本論が終わる。本論は、全体でもっとも長い部分であるし、もっとも書きやすい部分でもある。材料を揃え、シナリオができていれば、案外筆は進むものである。最初のうちは、文章の形態など気にしないでどんどん書き進めていくのが吉。校正は、後回し。

結論

仮説検証（考察・結論）

【説明】 研究や調査・実験を行い、それを考察する。その結果、初めに立てた仮説は検証されたのか、部分的に妥当性が認められたのか、あるいは、ある条件化では正しいのか。否定されたのか。自分が提示した問いが、研究によってどのように展開されたかを書く部分。研究のクライマックスとなる。

【結論】 初めに提示した「研究目的」や「仮説」を、どのように検証できたか、明らかにできたか、ということ力を限り書き連ねる。

本論の主張／今後の課題

【説明】 本論で検証した仮説を受けて、改めて、本論で明らかにできたことを述べる。最初に述べた「研

究の目的」に絡めると同時に、それによって、研究対象にどんな影響があるのか述べるのも良い。

【書き方】 「今後の課題」は、新たに生じた問題点や、検証した仮説から引き出せる新たな仮説、及び対象テーマの今後の深化の方向性を挙げる。何が明らかにできて、何に言及できなかったのか、執筆の途中で明確にできていればさほど悩むところではない。

「結論は明確に」を心掛け、自信がないことは書かないように。

推敲の極意！

書くだけ書いて分量もでてきたら、文章の体裁を整えていかなければならない。今まで述べてきたようなことを、気を付けながら書いてきたならば、構成としては大きな問題はないはずだが、やはり誤字・脱字、「てにをは」、主述の呼応、指示語が指すもの等、間違いだらけと言っても過言ではないくらい間違えていることに愕然とするかもしれない。

しかしながら、別段悲嘆することでもない。もちろん、そのまま提出してしまったら目も当てられないが、まだまだ直せる時間は残っている。即ち、推敲の時間である。

推敲のない「やっつけ仕事」の論文では、とても良い評価をもらえるとは思えない。いくら自分に自信があっても、とても変な間違いを犯しているものである。たとえば筆者の卒業論文は、「蔵書冊数」が「蔵書差数」になったままだったりする。本来間違いようのないところで間違える。分量も多いから確認漏れもある。ここでは、比較的確認漏れの少なくなる推敲の方法を伝授したい。

声にだして読め！

まずはここから。声に出して読むと、文章のおかしな部分が一目（耳）瞭然となる。耳から入る情報は強い。それに、声を出すことで眠気にも勝てる。

印刷して読め！

何ページになっても、推敲する時は必ず紙に印刷して読むこと。また、Nアップなど小さめに印刷するのも避けた方が良さそう。PCの画面を眺めているだけでは、思った以上に間違いは見付きにくいのである。

友達に読んでもらえ！

手が空いている友人（あるいは後輩）に（ご飯を奢って）論文を見てもらおう。自分では気付かない間違いや、自分しか分からないような言い回しを指摘してくれるだろう。友人なら誰でも良い訳ではないが、自分だけで見るのも限界があるし、背に腹は変えられない。先輩である院生にお願いするというのも一つの手である。

筆者がついた指導教官に言わせれば、「自分の書いたものの読み直しは100回やれ！」である。しかし、ただ数だけ多ければ良いというものでもない。100回行うにしても、効率的な作業で校正を行いたいものである。卒論（と言うより「研究」一般に言えるのだが）は、常に時間との勝負なのである。

より具体的な推敲方法は、別紙文献リスト(8)のp.138～を参考にして欲しい。

オススメの本

以上、主に「論文の書き方」を中心に、注意事項を見てきた。最終的には論文を書くあなたの頑張り次第であることは言うまでもない。ただ、その頑張りをいかに効率良く実らせるかについては、この拙稿を参考にしていただけたらと思う。

本論を書くにあたって参考にした図書は別紙として一覧にまとめた。いずれも大学図書館及び法経図書センターで借りることができるので、是非読んでみて欲しい。

平成21年6月25日

学習院大学図書館 卒論準備セミナー